



# MとKのこと

上坂元 絵里

今年度も、進級した十九人に十六人の新人児を迎えて、四歳児の生活が始まった。

入園進級式の日、保育室で、どんな新しい顔に出会えるのか、進級した子どもたちはどんな様子で現れるのか、緊張しながら待つ。いざ子どもたちが到着しだすと、次々に「おはようございませす。始めまして」とあいさつをするのもままなら

ないほどの目まぐるしさで、人数の多さに圧倒される思いを抱きつつの始まりであった。

## 人と関わるのが苦手なM

MとKは二人とも三年保育で入園し、進級した。Mは、夏の生まれにしては小柄で、幼い感じに見えるが、表情はあまり動かず、大人びた語



彙で話をした。電車が大好きで、入園直後は、柵から電車の本を選んで持ち出しては一人で眺めて過ごすことが多かった。保育室には木製の線路と汽車が置いてあった。電車が好きなのなら、それで遊ぶのが楽しいのではと考えたが、ほんの一、二度触ることはあったものの、それにすら取り付かなかった。

### 丁子ちゃんが好き

電車の本を見ているMのそばに寄って行くと、詳しい知識を一方的に話してくれたが、他の子どもに話かけたりすることは余りなかった。そのMの、降園時に丸くなって座るときには、丁子の隣に座ろうと必死になる姿があった。丁子と隣の子との間に、別の所から椅子を持ってきて押し込めうとしたり、空いているうちにさっと座ったり、日頃の様子から想像できない積極的な動きを見せ

た。丁子のほうは、それに対して迷惑がったり困っている様子は見られなかったが、継続した仲良しの関係にまではならなかった。

大変に慎重なMにとって、園庭のお山までの道を登っていくことも最初はちよっとした挑戦だった。転ぶと引きつったように泣いてしまうし、丸太の遊具に乗ったりするのも手をつないで恐る恐るであった。

少し経つと、Mのお気に入りの場所はそのお山と、園庭の桜の木の近くになる。一人でトボトボと歩いていたかと思うと、通りかかった保育者に話しかける、気がつくとも桜の木の囲みの椅子に背筋の力が抜けた状態でボーっと座っている、そんな





な姿が目に入るので、私はMに対してもっと個人的な支援をする必要があるのにと焦りを相当感じていた。

### 人と一緒に過ごすこと

三学期頃になると、担任がタイミングよく橋渡しすると、大好きなお山で年長の女兒とドンジャンケンポンをして遊んだり、丸太を電車に見立て、数人の子どもたちと場を共有したりすることは出てきた。ただ、大人がその場を離れるとあつという間に、そこから離れてしまう。担任は、何とか人と関わる場面を作らなくては、今日は少し人と一緒に過ごす時間があつて良かった。そんな思いに随分とらわれていたと思う。

お山で焚き火をするのもMが気にいっている遊びの一つであった。

年中に進級して間もない四月のある日、不安で

泣きそうなSの気を紛らわそうとお山に行く。木製滑り台の所で、三歳男児が木の枝を持って「しにするの」と言っている。聞きなおすと「火にする」だった。「じゃあ、ここで焚き火にしようか」と私は答え、滑り台の近くに枝を集めようとした。そばにいたMが「焚き火ならいい所があるよ」と、丸太が段々に埋めてあるところに私を引っ張って行く。枝を集めようと探していると、たまたま紙粘土で作ったさつまいも（本来は保育室のままごとで使うもの）が落ちていた。「焼き芋も作れるかしら」と焚き火の中に置くと、M「これは電子レンジで」と別の処を持って行ってしまう。「焚き火で焼いたほうが美味しいわよ」と私は声を掛ける。Mは芋を木の方へ戻す。そのうち、お山で遊んでいた子どもが三、四人集まってくる。ほんの少し経って『Mは?』と視線を泳がせると、Mはもう一つの丸太の方に一人で



行ってしまった。

このようにMが、人と一緒にイメージを共有して遊べる機会を持てるよう、保育者はかなり前に出ていろいろと試みている。けれども、結局Mはそこから外れてしまうことが多い。

人が寄ってきて関わりが生まれる好機なのにと保育者は考えるのだが、Mにとってはまだ何かを受け入れられない、大変なのだと思う。

人に対する愛着は持っているが、人との距離がある範囲を超えて近くなり、多くの人がそばに寄ってくると耐えられなくなるような……。

### T先生との出会い

Mは保育初日に、今年度着任のT先生と園庭で出会う。T先生を独占しようと手を離さないM、少し気になった私は他のことに興味が向かないかと働きかけてみるが、MはまたすぐにT先生を追

いかけていった。

思い返してみると、教育実習生が来たとき、あるいは担任に対しても、これほど自分から追い回すような行動は見たことがなかった。新しい場にデビューしたT先生にとっても、このようなMのアプローチは嬉しい面もあったのではと推察される。Mにとっては、新しい出会いで、自分を先入観なしに見てくれるT先生の存在が嬉しかったのかもしれない。ほんの小さなことではあるが、Mの今までは違う面を垣間見た思いがした。

### Mのこれから

年中組に進級して、子ども同士の関わり合いも





どんどん増えてくる。その中で、Mが友だちとの関わりをどう乗り越えていくのか、クラスの人数が増えた中でMに対して保育者はどう細やかに対応していくのか、まず私はそうした思いにとらわれていた。

Mは年中に進級して、特に目覚ましい変化や成長を見せている訳ではない。また保育者の側も、Mに対しての理解や関わりで、方向性が今まで以上に見えてきたとも言えない。

気になっていたMのことを、ここで書き綴りながら、今感じていることは、次のようなことである。

動けない、関われないMが、クラスの中にいるとき、私の心には、何とかMが動けるように、関われるようになってほしいという思いが大きな比重を占めていた。なぜ動けないのか、関われないのかを考えようとし、その上でMが動けるように

なるようにすることが保育者の責務と感じていた。

M可愛さの余り、保育者さえ目に入りにくいように感じる父親の関わりに原因を求めようとしたり、Mの気質的な弱さを考えたりもした。けれども「親子で遊ぶ日」の、母に甘え、嬉しそうなMの表情や動きを目の当たりにすると、単なる内弁慶の延長とも感じられた。

一年以上経った今だからこそ、Mの今をもう一度ありのままに受けとめ、無理のない歩幅で一歩ずつ歩んでいかれるように支えたいと思う。

つい先日、小さな積木を使ってタワーのように組み立てる遊びに、Mが随分能動的に関わったことがあった。別の先生が始めた一連の流れであったが、積木を真剣に積み上げ、次の積木を取りに行く動きには、心が動くとも身体の動きも生き生きすると素直に表現しているMがいた。物と楽しく



向き合い、関わるひとときもとても大切なのだと  
感じたひとときまでであった。

### Kのこと

三年保育の時のKは、気持ちが動き、好奇心が  
いっぱい、よく遊ぶ子どもであった。その一方  
で、自分が使って手離したおもちゃを、他の子ど  
もが使おうと、走り寄ってひったくってしまう。お  
弁当は落ち着いて座って食べられない、降園の流  
れには乗りにくいといった面ではだいぶ手がか  
かった。

### 一緒に通うお友だち

Kの通園コースは、多くの子どもたちが通うの  
とは反対方向であった。年中に進級して、同じ方  
向で通う人が随分増えた。

緊張しながら初めての幼稚園生活を始めたA

は、心が動きいろいろなことをして遊ぶKを後追  
いするようにして遊ぶようになる。

五月のある日、Aが「Kちゃん、一緒に遊ぼ  
う！」と、登園間もなく声を掛けた。当のKは  
「エーッ？」とまずは、不満そうな声。しかし、  
ほんの一瞬あとに「いいよ！」と応える。  
「エーッ？」と「いいよ！」の相容れない言葉の  
つながりを、ちようどそれを耳にした私は興味深  
く感じた。

昨年度も、随分友だちとの関わりは増えていた





Kだが、このように手続きを踏んで遊びだす場面はあまり印象に残っていなかった。

自分の思いがあつて遊び始めていたKにとって、Aの誘いは対立する方向性を持つていたといえる。しかし、Kの中にもAに対する好意が生まれていたから、瞬時に返事が変わったのではないだろうか。結局この後、KはAと一緒に遊び始めはしなかった。しかし、AがKに親しみを持つて呼びかけたこと、Kも迷いつつ方向を変えて返事をしたこと、しかも言葉で言えたことが重要だったのかと、小さな場面で考えさせられた。

「どうすればいいの？」

春の園庭の片隅には、たけのこ掘りの楽しさがある。小さな竹やぶの細いたけのこだが、ちよつと鬱蒼とした暗さに、見つける、掘る、皮をむくと言つた楽しさが重なる。そこは、様々な子ども

の出会いの場にもなっている。T先生を囲んで、数人の子どもたちがたけのこを探していた。Kは大人用の移植ゴテを持ち、それで木の幹を強くたたいていた。T先生もちよつど、気にしてそれを見ていらした。私は近寄り、Kの半そでから出ている素肌の腕を指差し「Kちゃんのこをたたくのと同じことだから、木も痛いよ」と少しさめるトーンで話しかけた。Kは動きは止めたものの視線は上げずに「じゃあ、どうすればいいの？」と聞き返した。私は、Kの動きを制止するニュアンスははっきりと伝えたつもりだったので、Kの素直な反応に一瞬驚いた。移植ゴテが出ていたのは、直前にプランターに朝顔の種をまいたときの片づけが不十分だったという反省の思いもあった。「土を掘るのができるけれどね」と応える。Kが「あつ、僕たけのこ探してるんだつた」と言うので、一緒にたけのこを探し、移植ゴ



テで一本掘った。

Kは決して流暢に言葉が使える方ではない。しかし、Kとのやり取りの中で最近、とても的確に言葉が使えるようになったと感じることが多い。また彼が考えて話す言葉は、保育者の脳裏に印象に残ることが多かった。

### 子どもの育つ姿を糧に保育する

昨年来のKとのやり取りを思い出すとき、彼の動きを無理に押しとどめたり、言葉で説得しようとした後味の悪さが、私の身体には残っている。いろいろなることを仕出かすKに対して、母親も随分と説得を試みている姿が見られた。

最近のKを見ると、自分で自分の思いを言葉で伝えられるようになり、納得して行動することが出来るようになり、幼稚園で生活することが随分楽になってきたように感じられる。

Kの育ちから、今までの私たちの対応を全て良しとしてはいけないけれども、Kのように、健全な育ちを見せてくれると、私たちはとにかく嬉しくなる。一方で、Mのように、まだまだ殻から抜け出せずにもがいている姿もある。私たち保育者は、Kのような「育つ姿」からエネルギーをもらい、Mが今の葛藤を乗り越えられるように支え、一緒に葛藤するエネルギーをもらっているのかとも思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)